



平易な実戦に役だつ実用の書

腰痛 人間の医学シリーズ・6

実地医家のための会

宮崎三郎・恵畑欣一・池田静哉 編集

序文にもあるごとく、“腰痛”という境界領域疾患に対し、実地医家はいかに対処していけばよいかということの解答が本書である。第一線で活躍中の各科のこの道の専門家が、長年の体験を結集し、そのエッセンスを一巻にまとめたのが本書の成り立ちである。一読すると、多面性を持った腰痛の問題を、いかに平易に、かつ実戦に役だつように編集に苦心されたかがうかがわれ、諸所に見られる欄外のメモはその一端と思われる。

編集内容は、冒頭、座談会形式による問題の提起、包括する問題の広さ、その対策など、知らず知らずのうちに、腰痛のアウトライン、核心に触れ、初心者にも近づきやすいが、専門家にとっても、看過しやすい要点を指摘している。

次に各論的に各科の専門家の記載になる各項目は、それぞれの患者の体から滲み出た特色のある力作であ

るが、なかでも腰痛の生理学では、‘いたみ’という困難な問題を生理学的に平易に解説しており、示唆にとむ裨益するところの多い項目である。また、筋原性関連痛と腰痛も興味深い問題で、著者の豊富な治療体験に基づき、腰痛に関する筋原性引き金機構につき述べてあり、一読に値する項目である。

その他、一般実地医家と腰痛なる項目下で、特にその予防として、日常生活指導にまで触れてあるのはリハビリテーションの観点からしてもかゆい所に手の届くような行き届いた記載であり、腰痛のX線診断の項においても、撮影の実際、X線像の解釈、X線写真の限界など、骨関節を専門とする整形外科医にもきわめて有益な内容と思われた。

その他、老人病学、産婦人科、あるいは整形外科から見た腰痛の記載があり、最後に東洋医学から見た腰痛も、この方面にまったく素人であ

る私自身興味深く読んだ項目である。

要するに本書の成りたちが、実地医家による“みずから必要とするものはみずからの手で”という趣旨のもとに、親しみやすく、平易に、かつ高度の内容を盛った本であり、一貫して目前にいる病める患者にいかに対処すべきかという、実戦に即した実用価値のある本であり、広く実地医家のみならず、各科専門医も一読に値する書として、私自身感銘をうけた本である。

欲を言えば、腰痛と関係のある姿勢に関する一項目と、腰痛の理学療法、リハビリテーションの一環として、姿勢体操、ウィリアムズ腰痛体操に関しても、少しく具体的に記載してほしかったが、いずれにしても本書の価値に関しては読者がよく評価するものと思われる。(B 6, 200ページ, 900円 医学書院)(日医大助教授・整形外科 石田 肇)